

個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組みV

— 基礎学力と行動力の向上を目指して —

玉田 和恵* • 神部 順子**
八木 徹*** • 城一 道子****
近藤 益世***** • 松村 豊子*****
古里 靖彦*****

要 約

本研究では、個に応じたキャリア教育を実現するために、基本的な生活を営むための生活習慣の確立、人間性を育むための心の教育、情報と文化を融合させた実践的教養教育、社会で働くことを意識させるための職業人講話・企業見学・インターンシップなど、さまざまな取り組みを実践し、効果を上げてきた。しかし、学生が社会人になるための大きな課題として、学力低下と積極的な行動力の欠如ということが数年間の取り組みの中で明らかになった。本稿では、情報文化学科で実施した基礎学力向上のための取り組み、行動力を育成するための実践、社会に出るための後押しをする取り組みについて述べる。

1. はじめに

1.1 大学教育に求められるもの

1998年10月の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」において、大学は、社会に貢献する人材の養成という役割を担っており、学生に高い付加価値を付けさせた上で社会に送り出すことが社会的責任であると述べられている。

これからの大学を評価する基準として、学生が在学中にどのような能力を身につけたか、いかに自立した人間として成長したかということが重要になると述べられている。

また、上記の答申を踏まえて2000年6月に出された「大学における学生生活の充実方策について（報告）— 学生の立場に立った大学づくりを目指して —」では、各大学が教職員の意識改革を行うことや、キャリア教育を充実させることの必要性が述べられている。教員の意識改革について、以前は学生が一定の能力を持っており、教員は自らの研究成果を教えさえすれば、学生自身が工夫をして勉強するという大学観があったため大学教員の関心が研究面にだけ向けられ、学生の教育に対する責任が十分に意識されてこなかったという前置きの後に、多様な学生が入学してくる現

2012年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科教授 教育工学

** 江戸川大学 情報文化学科准教授 情報科学

*** 江戸川大学 情報文化学科専任講師 情報化学

**** 江戸川大学 情報文化学科教授 英語教育学

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 英米言語文化

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 英語学

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 e-ビジネス

在の状況下において、教員自身が、正課教育はもちろんのこと、正課外教育も含めた大学生生活全般の中で、学生の人間的な成長を図り、自立を促すために適切な指導を行っていくことが基本的責任であることを明確に認識する必要があると述べられている。

また、大学教員は初等中等教育段階の教員と異なり、学生に対して教育・指導をする正規の訓練を受けていないため、学生に対するきめ細かな教育・指導を充実させるために、各大学において全学的・組織的にファカルティ・ディベロップメント (FD) を進める中で、教育・指導についての研修を行うことが求められる。この際、正課教育における授業内容・方法だけでなく、学生の人間的な成長を図る観点から必要な指導についても、その研修内容に加えることが適当であると述べられている。

また、就職についても次のように述べられている。学生にとって最大の関心事は、卒業後の進路であり、厳しい経済状況の中で自己の進路に不安を抱いている学生が多く、キャリア教育を充実し、学生に対して市場価値のある能力を磨き、変化する社会に対応できるキャリアの形成が重要となってくる。大学では、望ましい職業観や、職業に関する知識・技能を涵養し、自己の個性を理解した上で、主体的に進路を選択できる能力・態度を育成するキャリア教育を、大学の教育課程全体の中で、明確に位置づけて実施していく必要があると述べられており、そのために、「職業概論」、「キャリア形成論」など学生の職業意識の形成に資する授業科目の開設や、企業人など外部の講師による「産業論」、「企業論」など実践的な授業科目の導入など、教育内容をより実務的・実践的なものに再編することが、これからの社会の中でより一層求められる。論理性やものの見方、コミュニケーション能力、情報処理能力などを重視した教育課程を編成していくことも望まれる。しかし、キャリア教育の内容・方法について何が望ましいかということについての一般的な答えはなく、個々の大学が自らの状況に応じて、学生が身に付けるべき能力像を描き、その達成目標に向かっていくこ

とが重要であると述べられている。このように大学には、大学の専門教育以外にも正規科目としてキャリア教育を位置づけ、教員によるキャリア教育の実現に向けた工夫や取り組みが求められている。

1.2 情報文化学科におけるファカルティ・ディベロップメントの取り組み

これまで江戸川大学情報文化学科では、学生個々の特性に合わせたキャリア教育を実現するために、ファカルティ・ディベロップメントの取り組みとして、学生の人間性・社会性、教養を高めるための全人格教育を目指した取り組みを5年間に渡って実施してきている。これらの活動は正規科目・非正規科目・その他学生の大学生生活全般に渡る指導の取り組みであり、1.1で述べられている答申の目指すものと合致していると考えられる。

大学教育に求められるさまざまな要請と、情報文化学科のコンセプト、学生の特性に応じた教育を実現するために、以下の目標を達成することのできる教育方法を検討してきた。

- ① 人間性を磨く
 - (ア) 人間としての在り方や生き方について考えさせ、人と関係を作る力、自己をコントロールする力を育成する
 - (イ) さまざまな課題を発見し、取り組み、問題解決する力を育成する
 - (ウ) 情報を収集・分析し、社会の動きを見据えて現実を正しく理解し判断することができる力を育成する
- ② 感性を磨く
 - (ア) 感性を磨いて、自分の意図を相手に伝えることができる表現力を育成する
- ③ 学力を磨く
 - (ア) 基礎学力・専門性を磨いて、業務処理に対応できる実践力を育成する

本学科に入学してくる学生の多くは、大学卒業後に必ず就職したいという明確な希望を持っているものの、実際に自分が何をどのように努力しなければならないかということを明確にすることが困難な学生が多いという現状があるため、キャ

リア形成に向けた教育を実現するために、学生の目的意識や現実社会の厳しさを理解させる「動機付け（心）」、自分の目標とする職業に就くための就業力を育成する「テクニック（技）」、大学教育で専門性を育成するための「自分を鍛える（体）」という3つの視点で、授業や授業外のような活動にITと対面での徹底指導を併用して教育をしている。

1.3 本研究の目的

本稿では、これまでに情報文化学科で実施してきた個に応じたキャリア教育を実現するための取り組みを概観し、学力向上と行動力を育成するために、以下の事項を検討する。

- ① 情報文化学科に入学してくる学生の特性を知る
- ② 基礎学力を高めるためにどのような働きかけが効果的かを検証する
- ③ 行動力を育成するためにどのような取り組みが有効かを検討する

2. 学生の意識

情報文化学科に入学してくる学生に対して、2008年度入学者より毎年入学時に意識調査を実施している。この意識調査では、ほぼ100%の学生が情報文化学科に入学した動機として「就職のため」という理由を挙げている。これらの学生に対して、目標を達成できるように教育することが本学科の課題である。2012年度は、新入生だけでなく2, 3年生に対しても意識調査を実施した。実施手順は以下の通りである。

【調査時期】 2012年4月

【調査方法】 質問紙調査

【調査対象】 3 (2010) 年生 73名
2 (2011) 年生 62名
1 (2012) 年生 62名

【質問項目】

- ・入学動機 ・進路希望
- ・希望職種と業種
- ・就職・進学への知識と不安

「就職したい」という意欲については各学年とも非常に高い値であり、各学年で違いは見られなかった。「希望職種」については、情報文化学科ということから情報に関連した職業に就きたいと考える学生が多く、1, 2年生には、SE・プログラマ・Webデザイナーなどの技術職を志望する

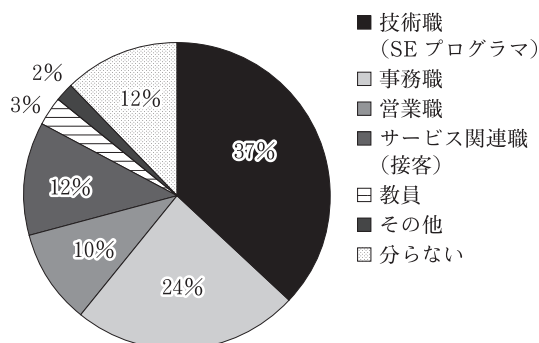


図1 将来就きたい職業 (2012年度【1年】生)

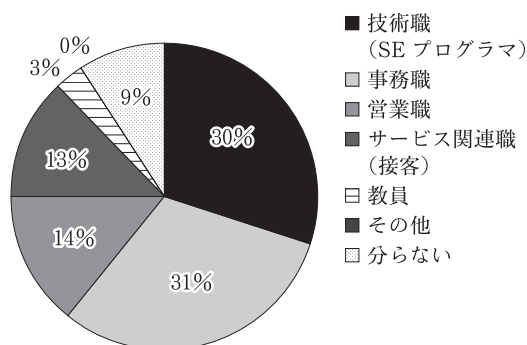


図2 将来就きたい職業 (2011年度【2年】生)

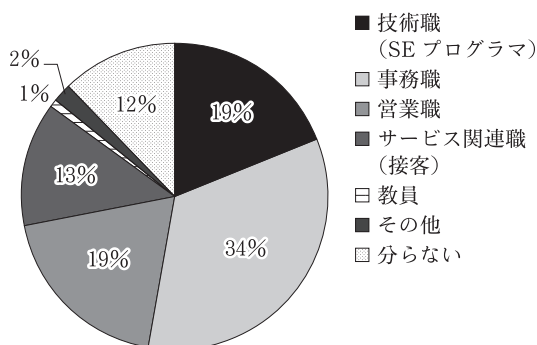


図3 将来就きたい職業 (2010年度【3年】生)

学生が30%以上存在する。ただ、例年の傾向であるが実際に就職活動を始める3年時になると自己の情報技術に対する不安からか、情報系を志望する割合が減り、事務系・営業系を志望する割合が高くなる傾向がある。教員を志望するものも毎年1~3名おり、「まだ分からない」と希望を明確にできない学生も10%前後存在する。

「就職・進学への知識と不安」の項目では、各学年ともに回答は同じ傾向であり、「就職や進学のために今自分が何をやっておくべきか」や「就職や進学のための方法」が明確に分からないというものが多く見られた。

一方、不安の傾向には学年によって違いが見られた。1年生は、将来に対する漠然とした不安が多く、「自分がやりたいことが分からない」とか、「自分が将来就職できるか」「時代や景気に対する不安」が多く述べられている。2年生の不安は、もう少し将来へのイメージができるようになっていくことを感じさせるものが多い。「自分が就職できるかどうか」に対する不安は1年生同様に多いが、「目標が決まっていない」ことへの不安や、「英語や数学などの学力面・筆記テストへの不安」や「自分の身につけたマナーで社会に通用するか」という自分の学力や態度・マナーなどに関する具体的な内容の記述になっている。

3年生になるとさらに傾向が変わり、不安というより、自分がこれまでに情報文化学科で学んできたキャリア教育を基に就職活動をしっかり頑張っていくという決意の記述が多く見られるようになっていく。自分の知識や社会に対する認識不足についても、1, 2年生の記述に比べてより具体的なものになっており、自己の弱点に対する分析やこれからやるべきことに対する明確な指針が述べられるようになっていく。

【1年生の不安】

- 自分がやりたいことがわからない
- 自分が就職できるかどうか不安
- 自分が志望する方向で就職ができるか
- 時代や景気に対する不安

【2年生の不安】

- 自分が就職できるかどうか不安
- 目標が決まっていない
- 英語や数学などの学力面・筆記テストが不安
- 自分の身につけたマナーで社会に通用するかが不安
- 具体的に何をやればよいか分からない

【3年生の不安】

- これまでに情報文化学科で学んできたことを基に絶対に就職するという決意
- これまで社会や就職について多く学んできたがまだまだ分からないことがたくさんある
- 就職難な世の中ですが、回復の兆しが見えないのがとても不安だが、後悔しないように、しっかりとした準備をしていきたいという意欲
- 現代の社会はとてもいい環境とは思えない。ニュースなどで多々見る“不況”と言う文字が現実の厳しさを教えてくれるが、それに負けず今から、SPIなど勉強して頑張っていきたい
- 今の時代、就職氷河期にある中で自分が就職できるかという不安
- 自分のコミュニケーション能力の低さに対する不安

このように学生の就職・進学への不安に1, 2, 3年生で違う傾向が見られることは、情報文化学科で実施されている教育によって、自己の目標ややるべきことへのイメージが学年を経るごとに、ある程度確立されるためと考えられる。

3. 基礎学力を高めるための取り組み

情報文化学科では、「情報処理基礎」「情報統計論」「情報文化キャリア論Ⅰ・Ⅱ」「情報文化キャリア演習Ⅰ・Ⅱ」など正規科目の中で基礎学力向上の取り組みを盛んに行っているが、正規科目以外にも基礎学力を向上させるための取り組みとして、表1の内容を実施している。

表1 基礎学力を高めるための取り組み

| | |
|-------|--------------|
| 4月 | 入学時学力チェックテスト |
| 8・9月 | 夏休み課題 |
| 9月 | 夏課題チェックテスト |
| 12・1月 | 冬休み課題 |
| 1月 | 冬課題チェックテスト |
| 2・3月 | 春休み課題 |

3.1 入学時学力チェックテスト

2009年度から毎年、入学時に高等学校までの基礎学力に関するテストを実施している。内容は、国語・英語・数学・理科・社会について、企業が実施する一般常識レベルの出題である。

具体的に、次のような内容を出题している。

国語：漢字の読み書き・文学・古典・ことわざ

英語：単語・英文（和訳・英訳）

数学：方程式・数列・集合・図形

理科：人体・天体・元素記号

社会：日本史・世界地理・国連機関

3.2 夏休み課題・夏課題チェックテスト

2か月に渡る夏休みに、学生の基礎学力を向上させるための取り組みとして、毎年夏課題を1・2年生を対象に実施している。夏課題の内容は図4の通りである。デジタル表現力を身に着けさせるための「デジタル絵日記」、基礎学力を身に着けSPI言語・非言語、一般常識の試験に対応する学力を身に着けさせるための課題、英語の単語力を上げるための自作ソフトウェア（「単語力をアップしよう！ JACET 8000」（図6）による単語の学習、文学に親しみ感性を高め自己表現力を向上させるための読書感想文を実施している。

そして、夏休み課題による成果を評価するために、後期初回の「情報文化基礎」「情報文化演習・実習」で、夏課題チェックテストを実施している。また、夏課題はノートにまとめて提出することを義務付けている。例年、課題を最後まで提出しない学生が多くいたが、今年度は1年後期、2年後期の授業科目で呼びかけ、すべての学生が提出するように徹底した。その結果、学生は提出物を提出せずに逃げ切ることとは不可能だということを知り、別の課題についても、期限を守って課題を提出するようになった。

学 生 各 位

平成24年7月9日

夏休みの課題について

今年の夏課題は以下の通りです。目標を持って有意義な夏休みを過ごしましょう。提出期限は必ず守りましょう。

| 学年 | デジタル課題 | 基礎学力 | 文化課題 | テスト・提出期限 | |
|----|-----------------------|-----------------|---------------------------------------|------------------|-------|
| 1年 | デジタル絵日記 | SPI 基礎問題 英単語 | 読書感想文（青空文庫） 1200文字程度 （原稿用紙・手書き） | 9月24日（月） | D 351 |
| 2年 | 情報課題 （Word & Exel） | | | 9月25日（火） 演習実習 | D 122 |

1年生：デジタル絵日記

目標…デジタル表現力を身につける

内容…画像編集ソフト（ペイント等）とワードを活用して日本語（5日間）英語（5日間）の絵日記をつける

評価…提出物を情報文化基礎の成績（20%）で評価する

手順…① 絵日記の書式をエドクラテス（基礎ゼミナール（夏課題））よりダウンロード

- ② ペイント等（画像編集ソフト）で絵を描く
- ③ ワードに絵を貼り付け、日記の文章を記述し保存する
- ④ 1日単位で保存する（2MB以下で）【ファイル名（名前_日付）（例：山田花子_721.doc）】
- ⑤ エドクラテス（基礎ゼミナール（夏課題））に提出する【もし、エドクラテスにアップロードできない場合は9月24日（月）の情報文化基礎の時間にUSBメモリで提出】

2年生：情報課題【Word & Exel】

目標…情報活用能力を身につける

評価…2年生は情報文化演習・実習で試験をして、成績評価（20％）する

手順…文書処理演習・表計算演習等の教科書の総復習しておく。

「30時間でマスター Word 2007（実教出版）」

「30時間でマスター Excel 2007（実教出版）」

- 9月25日（火）4時限目に、テストを実施【Word・Excel 総合課題】

1・2年生：SPI 基礎問題・英単語

目標…基礎学力を身に付け SPI 試験・一般常識試験への対応力を身につける

手順…配布された、SPI 基礎問題・英単語を徹底して学習する。

- SPI 基礎問題はノートにやる…ノートを提出
 - 英語 エドクラテス「単語力をアップしよう！（JACET 8000）」を1000回以上やる…提出用シートを提出
- ノート・シート提出・テスト【1年：9月24日（月） 2年：9月25日（火）】

1・2年生：読書感想文

目標…文学に親しみ、感性を高め自己表現力を身につける

手順…「青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）」に掲載されている文学作品を選んで読む。

（青空文庫は死後50年以上経過して著作権が切れた作家の作品が掲載されています。明治・大正・昭和の文豪の作品を読むことができるので、この機会に1冊選んで読みましょう）

- 原稿用紙3枚（1100～1200文字）手書き（原稿用紙の正しい記入方法で）提出【1年：9月24日（月） 2年：9月25日（火）】

図4 2012年度 夏休み課題の通知文

夏課題（言語分野）

【夏休みに努力すると】

1. 規則正しい生活を送る
2. 計算や漢字の勉強をする
3. 本を読む・映画を観る
4. 感動をする体験をたくさんする
「学生時代に頑張ったこと」を作る
5. 新聞を読む・ニュースを見る

図5 2012年度夏課題の表紙

JACET8000英単語テスト

0語正解したよ!!

| 問題 | | Level.1 | | | | 解答結果 | |
|-----|------------|---------|--------|------|--------|------|--|
| No. | 英語 | 漢字 | 読み仮名 | 意味 | あなたの解答 | 正解 | |
| 661 | television | テレビ | テレビジョン | 見る | | | |
| 528 | travel | 旅行 | トラベル | 旅行する | | | |
| 20 | clear | 小さい | クリア | 公認な | | | |
| 703 | morning | 人々 | モーニング | 情報 | | | |
| 860 | promise | 約束 | プロミス | 成長 | | | |
| 712 | day | 日 | デイ | 神神 | | | |
| 375 | cry | 泣 | クライ | 練習 | | | |
| 162 | court | 庭 | コート | 物産 | | | |
| 158 | middle | 中央 | ミッドル | 生命 | | | |
| 39 | so | そんなに | ソー | 一階 | | | |

問題を閉じる

Level.1 Level.2 Level.3 Level.4

4 100 200 300 400 500 600 700 800

図6 単語力をアップしよう！ JACET 8000

4. 行動力を育成するための取り組み

4.1 全員参加の学園祭

最近の傾向として積極性や行動力に欠ける学生が多く入学してくるため、社会に送り出すための準備として、行動力を育成するための取り組みを行っている。その一環として、今年度は、学園祭を全員参加で成功させるための取り組みを行った。制作物等の事前準備はリーダーを中心にいき、当日は1、2年生が全員参加して、会場設営・飾り付け・展示物の掲示を行った。多くの学生が一堂に会して作業をするため、リーダー学生が仕事内容をテキパキと割り振りながら指示を出さなければならない、途中で作業がなくなる学生や、仕事をしない学生が出ないように、周囲に配慮しながら全体の運営を行った。また、リーダー以外の参加学生は指示を聞いて、自分がどのように作業をするとより効率が良くなるか、情報文化学科の展示物を見学に来られる方にどのように見ていただくと良いかということを考えながら、効果的な掲示ができるように協力して作業に励んだ。

最終的に、後日「情報文化学科の学園祭に参加して」というレポートをA4(2枚以上)で提出したが、そのレポートには、学園祭に参加して自分が情報文化学科の一員として活動したことに対する満足感や、先輩や同輩の作品を見たり、掲示したことによって学んだことがさまざまな形で綴られていた。

教員側の驚きは、これまで学生は学園祭には消極的で、できればこの期間は長期休暇として、様々な活動を行うチャンスだと考えており、参加を呼び掛けても少数の参加しか得られないのではないかと危惧していたが、結果的には、ほとんどの学生が呼び掛けに応じて、準備、当日、片付けまで、全ての活動に参加したことである。

今年度の活動により、学生は、学園祭期間を利用して学業以外のさまざまな活動をしているわけではなく、無為に時間を過ごしていることが多く、学園祭のためにみんなで活動することを呼び掛けると、それに応じて参加することが分かった。学



写真1 学園祭準備日の集合



写真2 学園祭準備の様子



写真3 学園祭当日のミーティング

生の行動力を育成するためには、行動する機会をできるだけ多く設けて、積極的に参加を促すことが重要だということが明らかになった。

4.2 日本の基幹産業を知るための工場見学

情報文化学科には「情報社会と職業」「E ビジ

ネス論」「情報文化キャリア論Ⅰ・Ⅱ」「情報文化キャリア演習Ⅰ・Ⅱ」など企業や社会を知るための授業科目が整備されているが、授業だけでなく実際に実業の現場に赴き、働いている方々を目の当たりにすることは学生の行動を促すために重要だと考えられる。

今年度は、日本の基盤を作り上げてきた基幹産業を体験することによって、社会に対する考えや働くことの意義などを考えさせ、これからどのように自分が行動するべきか、ということを考えるきっかけにしようとして製鐵工場の見学を試みた。

2012年11月5日に、新日鐵住金株式会社の君津製鐵所を訪問した。製鐵所の壮大な規模に圧倒されて、これが日本の基盤を作ってきた産業なのだということを学生は実感したようである。まず、新日鐵と住友金属との合併について、製鐵の仕組みや工場見学の流れ、環境に関する取り組みについての説明があり、ヘルメットをかぶって工場見学に出発した。

君津製鐵所では、広大な敷地内に、資源のリサイクル・製鐵・効率のよい資源循環システムが実現されている。日本最大級の第四高炉で真っ赤な鐵が作られている様子は、数十メートル離れていても熱気や迫力を感じさせるものであった。厚板工場の熱間圧延設備で鐵を伸ばしていく工程では、圧力を掛けながらローラーの上を何千度にも熱せられた鐵が滑り、伸ばされていく様子を見学した。激しい蒸気や熱風が鐵をどんどん伸ばしていく迫力には学生も圧倒されており、工場見学の全てにおいてスケールの大きさに感動し、自分はとても小さな世界で生きていたのだということを痛感したようである。後日提出されたレポートからは、今回の工場見学で、学生が大学生活では絶対に見ることのできないものを見て、ものづくりや企業への興味関心を深めたことが述べられている。

ソフトウェアや通信など形の見えないものではなく、日本の基盤を作ってきた鐵というものが作られる工程を目の当たりにしたことで、社会全体を支える大きな仕事があることを知り、自分の仕事に誇りを持って働けるような社会人になりたいという強い決意を持った学生が多かった。最後に、



写真4 製鐵の仕組みについての説明



写真5 君津製鐵所本館前



写真6 第四高炉（君津最古の高炉）

新日鐵住金株式会社の方から、賃金が高くても日本で鐵を作り続けることの意義についてお話をうかがうことができた。学生の多くは、自分の職業について考えるだけでなく、日本の中で自分がどう貢献していくかという視点を持つことができたようである。

5. 社会に出るための後押しをする取り組み

5.1 朝の挨拶と自主勉強

情報文化学科では、人間性を磨く活動として、基本的な生活習慣の確立、人としてどう生きていくべきかということを徹底指導している。本学科では年2回個人面談を実施することとなっているが、本研究グループでは、毎日担当する学生が研究室を訪ねてきて、挨拶とともに、近況報告をするのが通例となっている。学生は教員と対話することによって、挨拶・礼儀とともに大人と対話をするコミュニケーション力を身につけるのである。

専門ゼミナールに配属された学生は、毎朝8時～8時半の間に教員の研究室を訪ねてきて挨拶を行う(写真7)。その際、社会で通用する挨拶・お辞儀の仕方や、自分に欠けているもの、今何を学習しなければならないかということについてのアドバイスを受ける。情報文化学科では、1年次からキャリア関係の授業科目で挨拶の仕方については徹底して指導されているが、なかなか実践する機会がないため、各教員の研究室を回って実践



写真7 朝の挨拶 (AM 8:15)



写真8 朝の自主勉強会 (AM 8:30)

を積むこととしている。朝早く起きることは人間の基本的な生活習慣を確立するために大切なことであり、社会人になる準備として生活リズムを整えることが重要だと考えられる。また、社会で通用する挨拶も一朝一夕でできるものではないので、毎朝訓練することには大きな意義があると考えられる。

その後、各自の課題や弱点に応じて、講義が始まるまでの間、自主勉強を行う(写真8)。学習内容について分からないことが生じた場合には、すぐに教員研究室を訪ね質問やアドバイスを求めることができるので、通常の講義と違って各自の達成度に合わせた学習が行われている。ここで、しっかり時間をかけて基礎学力を身につけた学生は、キャリアセンターが実施する模擬テスト等でも素晴らしい結果を残している。

5.2 特別講義・インターンシップ

今年度も例年通り、学生の人間性を高め、社会に対す認識を深め、折れない心を育成するために、社会の第一線で活躍している方々の生き様に直接触れるため、職業人を招聘して「特別講義」実施した(表2)。特に「社会が学生に対して何を求めているのか」ということを痛感させ、これまでの意識を変革させ「これから自分たちはどう生きていくべきか」ということを真剣に考えさせるための機会と位置づけて、学生を社会に出すための後押しの取り組みとして実施した。

インターンシップには、20名の学生を派遣した。

表2 2012年度特別講義講師一覧

| | |
|---|-------|
| 千葉県商工会議所連合会 元会長 株式会社ケーブルネットワーク千葉 元代表取締役会長 | 千葉 滋胤 |
| 茨城大学大学院理工学研究科 教授 | 高妻 孝光 |
| インテレクチュアルアドバイザー | 西内多恵子 |
| 原子力安全基盤機構 技術顧問 | 浜田 信生 |
| 国土交通省 国土交通審議官 | 北村 隆志 |
| 著述家 | 高橋 孝蔵 |
| 文化放送 社長 | 三木 明博 |



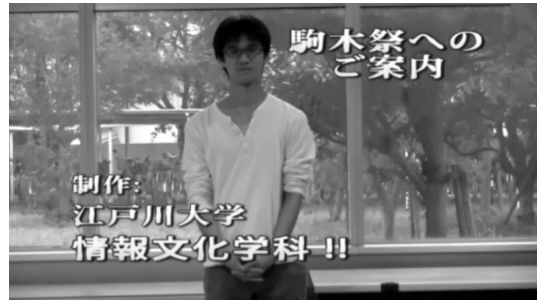
写真9 北村隆志（国土交通省国土交通審議官）

今年度受け入れてくださった企業は表3の通りである。例年、多くの企業の方々にご協力いただき、実際の業務を体験させていただくと共に、社会人になるための心構えを学ばせていただいている。「礼儀やマナーの大切さ」「コミュニケーション能力の必要性」「業務に必要となる知識・技能が全く自分ないこと」「受け入れてくださった企業の方々、準備を担当した先生方への感謝の気持ち」を修得し、自分たちが多くの人々に支えられながら生きているのだということを体得している。

今年度は、インターンシップ終了後「JCN コアラ葛飾」の方から、「学園祭のCMを自分達で作成したら放送してあげるよ」という素晴らしいお話をいただいた。インターンシップに参加させていただいた学生が仕事に非常に真面目に打ち込んで頑張っていたので、彼らのために何かやってあげたいという気持ちをJCN コアラ葛飾の方が持ってくくださったようである。学園祭前の10月

表3 2012年度インターンシップ先一覧

| | |
|--|---|
| 文化放送 JCN コアラ葛飾 JCN 千葉 JCN 船橋習志野 JCN 足立 ティ・オー・エス | NHK メディアテクノロジー 東京メトロ アライドテレシス 千葉銀行 |
|--|---|

写真10 学生が制作した駒木祭CM
(JCN コアラ葛飾放映)

末に学生が制作したCMを放送していただいた(写真10)。

5.3 長崎研修・ニューヨーク研修

「長崎研修」では、長崎めぐりや田上市長との懇談を通して、「命の尊さ」や「平和」について真剣に考え、今を生きる自分たちが、何をすべきかということ学ぶことができた。今年度、田上市長からは「私たちは今、20世紀型のOS（仕組み）から21世紀型のOSへの変換期に生きている」というメッセージが強く語られた。その後、長崎大学を訪問し、教育学部の学生とのシンポジウムを行った(写真11)。

「ニューヨーク研修」では、ミュージカルやオペラ、美術館鑑賞など超一流の文化にも触れると共に、ニューヨークで世界中を股にかけて活躍しているビジネスマンから直接話を聴くことによって、大学の中にいたのでは学べない感性を磨いた。今年度は、千葉銀行と日本テレビのニューヨーク支社を訪問させていただいた。写真12は千葉銀行ニューヨーク支社で為替の取引を取材させていただいているところである。



写真11 長崎大学でのシンポジウム

写真13 就職活動開始決起集会
【2012年12月1日 AM 7:00 海浜幕張駅前】

写真12 千葉銀行ニューヨーク支社



写真14 セミナー会場の前にて

5.4 就職活動開始決起集会

現在、12月1日が大学生の就職活動解禁日であり、エントリーや会社説明会が開始される。2012年度は12月1日(土)に幕張メッセで「千葉県29大学合同就活応援セミナー」が開催された。情報文化学科では、これまでの教育の成果を基に学生が就職活動を開始するこの日に、海浜幕張駅前では就職活動開始決起集会を実施した。

参加した教員や学生の多くは始発電車に乗って、海浜幕張駅に集合した。最も早いものは6時には、海浜幕張駅に到着していた。寒いながらも、各学生はスーツに身を包み、引き締まった面持ちで、これから始まる就職活動に想いを馳せていた。事前に参加することが分かっていた学生については、ゼミ担当教員が負担をして、湯島天神の就職活動お守りを渡した。

早朝の海浜幕張駅前で、先生方からの応援を受



写真15 千葉県就活応援セミナー

け、学生代表がこれからの決意を述べて「頑張るぞ!」とみんなで叫んでから会場に向かった(写真13)。当初は、30名程度の参加であろうと予測されていたが、学生間で決起集会があることが伝わったらしく、最終的には情報文化学科の3年生で就職活動を目指している学生の大半が集合した。

教員にとっても学生にとっても、冬の早朝の集合は大変であったが、それ以上にこれから始まる就職活動に向けて、各人の心構えができ、緊張感のある引き締まった活動が開始できたことが良かったと思われる。学生も応援に来てくれた教員に対する心からの感謝と、その想いにこたえたいという気持ちを新たにしたいようである。

5. まとめと今後の課題

本研究では、個に応じたキャリア教育を実現するために、基本的な生活を営むための生活習慣の確立、人間性を育むための心の教育、情報と文化を融合させた実践的教養教育、社会で働くことを意識させるための職業人講話・企業見学・インターンシップなど、さまざまな取り組みを実践し、効果を上げてきた。

しかし、学生が社会人になるための大きな課題として、学力低下と積極的な行動力の欠如ということが数年間の取り組みの中で明らかになっていった。本稿では、情報文化学科で実施した

- ・基礎学力向上のための取り組み
- ・行動力を育成するための実践
- ・社会に出るための後押しをする取り組み

について検討した。

これらの活動の中から、基礎学力を向上させるために課題提出を徹底することの大切さや、行動力を身につけさせるために、さまざまな活動の機会を与え、一緒に参加し適切なアドバイスをすることの重要性が明らかになった。また、社会人になるための後押しをするためには、基本的な生活習慣や人としてのマナーを毎日地道に指導することの大切さ、特別講義・インターンシップ・長崎研修・ニューヨーク研修などを通じて実際に学生と社会との接点を持たせることや、決起集会などを開いて、ここぞと言うときに緊張感を持って活動することの大切さを教員が身をもって伝えることの重要性が明らかになった。これらの結果を踏まえて、今後、個々の学生の基礎学力や社会に対応できる行動力を育てる方法をさらに検討していきたい。

謝 辞

本研究は平成24年度学内共同研究「基礎学力を向上させるためのキャリアサポートプログラムの開発」の支援を受けて行った。関係各方面の皆様には感謝いたします。また、本研究にあたって、さまざまな方々の協力をいただいた。特別講演会にご協力くださった皆さま・長崎の皆さま、ニューヨークの皆さま、活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

参考文献

- 大学審議会（1998）「21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学——」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315917.htm（参照日2012年11月10日）
- 大学審議会（1991）大学審議会答申「大学教育の改革について」文部省
- 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会 中間報告書」<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf>（参照日2009年11月10日）
- 厚生労働省『若年者の就職能力に関する実態調査』結果<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/h0129-3a.html>（参照日2012年11月20日）
- 文部科学省（2000）「大学における学生生活の充実方策について（報告）——学生の立場に立った大学づくりを目指して——」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm（参照日2012年11月15日）
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・古里靖彦（2009）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」江戸川大学紀要『情報と社会』, 19, 293-303
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦（2010）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅡ——人間力を育成するための教養教育を目指して——」江戸川大学紀要『情報と社会』, 20, 203-212
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦（2011）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅢ——職業人との関わりを通じた成長——」江戸川大学紀要『情報と社会』, 21, 245-257
- 玉田和恵・神部順子・八木徹・古里靖彦（2012）「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅣ——基礎学力の向上を目指して——」『江戸川大学紀要』, 22, 21-30